

## 役割語にも文法化は存在するか

金水 敏

定延 (2007) では、日本語の文末に表れて話者のキャラクターの指標となる「キャラ語尾」を、「キャラ・コピュラ」と「キャラ助詞」に分けた。前者は「だ」「である」「でござる」「でござんす」等、現実の言語のコピュラと同じかたちをしているものである。また「キャラ助詞」は概ね終助詞相当で、「文末らしい文末」に表れるとする。キャラ助詞はさらに現実の言語にはない形式を自由に導入することができる。

役割語の用例を調べていくと、キャラ・コピュラに相当する形式が、後続の作品ではあたかもキャラ助詞のような用いられかたをする例が見られるが、逆は見られない。例えば中国人キャラクターを想起させる「ある語法」(金水 2014)には a)「机の上に本○ある」 b)「これ長生きの薬○ある」 c)「これ昨日買ったある」 d)「早くしろある」のような用法が見られるが、bはキャラ・コピュラ、c・dはキャラ助詞相当と捉えられる。c、d (特に d) は相対的に新しい作品にしか表れない。ここに見たような「キャラ・コピュラ→キャラ助詞」という変化は、文法化と同じものと見てよいのか、そうであるとすればなぜヴァーチャルな言語である役割語に、リアルな言語と同様に文法化が起こるのか。これらの問題を考えることは、文法化の理論化にとっても重要なヒントを与えるであろう。